

第14回

監修・執筆 上田 信

モンゴル帝国 ～草原と海の帝国～

今回学ぶこと

13世紀から14世紀なかばにかけて、ユーラシア大陸の大半を勢力下に置いた大帝国が存在した。モンゴル高原東北部のモンゴル部族出身のチンギス・ハンが造り上げたモンゴル帝国である。なぜ大帝国が成立したのか、その理由を遊牧というモンゴル部族の生業、帝国が重視した交易などの面から探る。チンギス・ハンの孫フビライは、国名を中国風に「元」とし、モンゴル高原や中国を支配するとともに、海へとその勢力を伸張させようとした。

調べておこう・覚えておこう

- 遊牧という生活について、衣食住や家族のあり方などを調べてみよう。
- チンギス・ハンがなぜ大帝国の基を造れたのか、考えてみよう。
- マルコ・ポーロがたどった旅について、『東方見聞録（世界の記述）』を読み、そのルートや各地での出会いなどを確認してみよう。

モンゴル高原と遊牧

モンゴル帝国の出発点となったモンゴル高原の自然環境は、寒冷で乾燥した気候のもと、山には森林が、そのふもとの高原には草原が広がっている。こうした環境のなかで、山林では狩猟採取、草原ではヒツジやヤギ、ウシ、ウマ、ラクダなどとともに移動する遊牧という生活のあり方が生まれた。

1つの場所に定住すると、家畜が草を食べ尽くしてしまうため、季節に応じて草原を求めて移動する。食べるものは、ヒツジなどの肉やヤギなどの乳を主とする。「ジンギスカン料理」を思い浮かべるかも知れないが、そのレシピは日本で生まれたもの。モンゴルでは肉は煮るのが主流。乳からはチーズやバターなどの乳製品が作られる。住居は移住に適した組み立て式のゲルと呼ばれるもの。家族が力を合わせれば、1時間程度で組み立て終わる。

厳しい環境で生きぬくために、モンゴル族は信義を重んじ、モノを分け合う気風が生まれた。

家畜を追い、狩猟を行うなかで、騎射に秀でるようになった。こうした生活のなかで、大帝国を造る人々が育ったのである。

チンギス・ハンと帝国の成立

モンゴル高原を勢力下においていた遼^{りょう}が12世紀のはじめに滅びると、モンゴル高原の諸部族のあいだの緊張が高まった。伝承によると、高原の東北部で生まれたテムジン（のちのチンギス・ハン）は、部族の抗争のなかで父親を暗殺され、属していた部族から見放されて母親のもと兄弟が力を合わせて生き抜いたとされる。この伝承は、家族とその身近な親族から成る世帯を基礎にすえた新たな社会の仕組みを、テムジンがつくったことを反映しているものと思われる。

それまでの部族ごとに草原を争っていた状況を乗り越える新たな社会の仕組みに基づき、テムジンはモンゴル系・トルコ系の諸部族を次々に統合した。1206年にはテムジンは内陸アジアの遊牧民のあいだで君主を意味する「ハン」に即位し、チンギス・ハンとして歴史の表舞台に登場する。彼は全遊牧民を出身の部族の枠を越えて、世帯を千の単位で編成し、各世帯から戦士を出すという制度（千戸制）を創設した。

社会と軍事とが一体化した制度に基づいて編成された巨大な騎馬軍団は、チンギス・ハンとその後継者のもとでユーラシア内陸部の大半を勢力下に収める大帝国を造る原動力となった。

フビライ・ハンと海のルート

モンゴル帝国内の主導権をめぐる対立のなかで、チンギス・ハンの孫のフビライは、帝国の東方に支配の重心を置き、いまの北京の地^{だいと}に大都と称する都を置き、国号を「元」とした。長江以南に存続していた南宋^{なんそう}を滅ぼし、中国・モンゴル高原を支配し、チベット高原や朝鮮半島にまで勢力下に置く。

フビライは元を中心に、ユーラシア全域にわたる交易を盛んにさせる方策を採った。主要幹線道路の往来をさまたげる地方勢力を排除することで、遠隔地のあいだの交易が活発に行われるようになった。さらにその勢力を海の向こうにも広げようと、日本やジャワに遠征軍を送る。この軍事行動は失敗したが、その後に海上の交易は盛んになった。

イタリアのヴェネツィア出身のマルコ・ポーロは、こうしたフビライが統治する世界のもとで、内陸アジアを経て中国に至り、帰路は海路で南シナ海・インド洋を経て地中海に戻るといって大旅行を成し遂げたのである。